



カレント
Current

R23



パウルソンサンゴガニ *Tetralia cinctipes* Paul'son, 1875

八”放”美人 Vol. 7 : *Briareum cf. cylindrum*

サンゴの素敵なパートナー : ヒメサンゴガニ属

なぜクラヤミモミジマトイなのか？

水深 3000 m で魚釣りしてみた

古井戸 樹

平林 勲

伊勢 優史

平坂 寛

公益財団法人 黒潮生物研究所

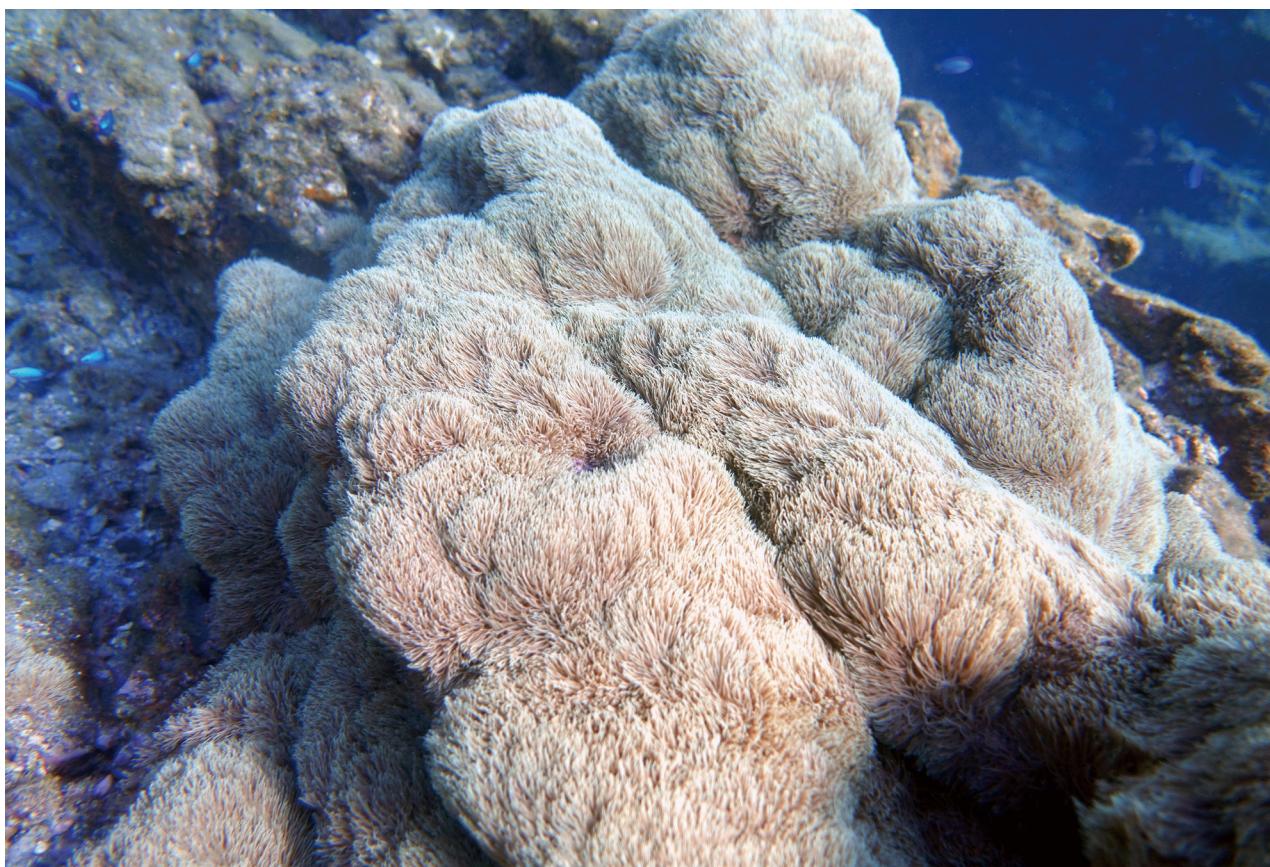


図 1. 岩盤を覆う *Briareum cf. cylindrum*. 海流でポリップがたなびく姿が美しい。

ウスカワヤギ属 *Briareum* は、アクアリウムでも人気のあるソフトコーラルの一つで、『スター ポリップ』という名前で流通しているため、アクアリストの方にはなじみ深いソフトコーラルではないでしょうか。今回、黒潮生物研究所の近隣の高知県大月町柏島で *Briareum cylindrum* samimi-Namin & Ofwegen, 2016 と思われる八放サンゴ（図 1）を採集したため、ご紹介します。

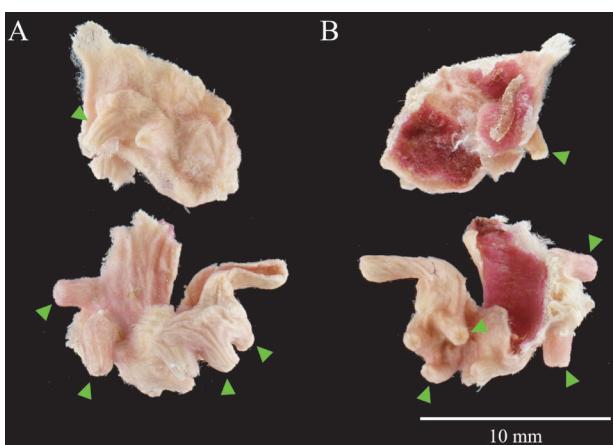


図 2. エタノール液浸標本。表層 (A) は白色、内層 (B) は赤紫色。緑色の矢印は莢を示す。

ウスカワヤギ属は群体がシート状で岩や死んだサンゴの骨格を覆って広がるソフトコーラルです。共肉は表層と内層の二層に分かれ、内層は骨片が多数集合し髓部を形成しています。この髓部を形成することから、明瞭な骨軸（群体の中央を貫く、角質や方解石からなる軸）を形成しないものの、宝石サンゴなどを含むヤギ類に近縁であると考えられています。

今回採集したサンプルも群体が二層構造になっており、群体表面は白色、裏面は赤紫色になっています（図 2）。骨片は莢（ポリップ周縁の共肉の突起）上部では無色の扁平な桿（かん）状、共肉表層では無色の紡錘状・円筒状・三叉状、共肉内層では赤紫色の紡錘状の骨片を持ち、融合することもあります（図 3, 4）。大きさは莢上部で 0.20 ~ 0.32 mm、共肉表層で 0.33 ~ 0.63 mm、共肉内層で 0.26 ~ 0.60 mm で、多数の瘤状突起で覆われています。

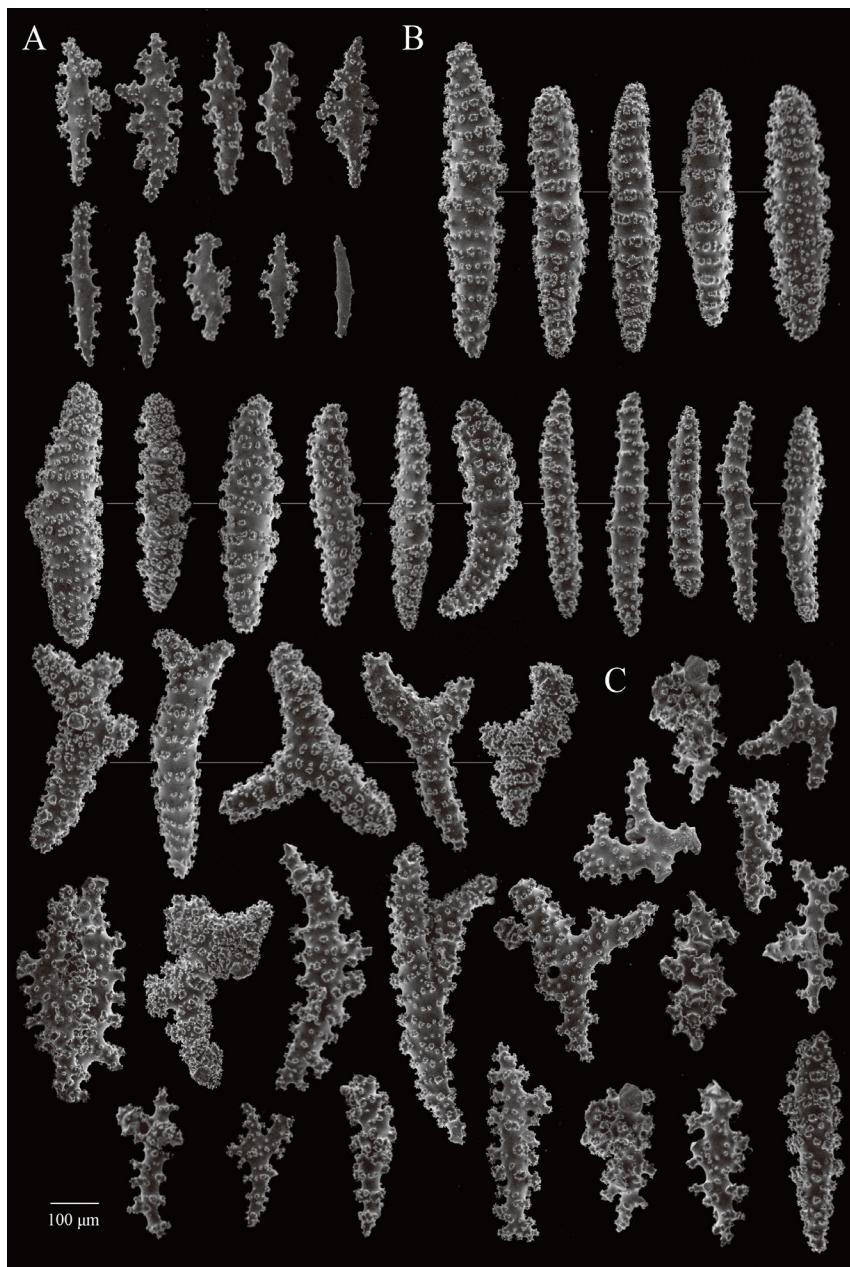


図 3. *Briareum cf. cylindrum* の骨片電子顕微鏡写真 . A. 荘上部 . B. 共肉表層 . C. 共肉内層 .

以前、実験用にウスカワヤギ属を飼育していたところ、センジュミノウミウシ *Phylloidesmium briareum* (Bergh, 1896) (図 5)と思われるウミウシが発生してしまい、食べられてしまったことがあります。ポリップを食べつくし、莊（図 2, 緑色矢印）の上でポリップとそっくりなミノ状突起や触角を広げているウミウシを見逃していました。

このセンジュミノウミウシを始めとした八放サンゴ類を宿主とするウミウシは、その体を宿主のものと非常に良く似せ、なかなか見分けがつかないものが多く、非常に感心します。



図 4. *Briareum cf. cylindrum* の骨片顕微鏡写真 . A. 共肉表層 . B. 共肉内層 .

Briareum cylindrum の種小名である『cylindrum』は英語の『cylinder (円筒)』、共肉表層の円筒状の骨片からつけられています。本サンプルも共肉表層に円筒状の骨片を持ち、その表面は多数の瘤状突起で覆われること、各部位の骨片の色、骨片の大きさなどの特徴は *Briareum cylindrum* と一致しますが、本サンプルでは莊が大きく突出する（図 2）ことや、莊上部の桿状骨片の瘤状突起が大きく発達すること（図 3A）が *Briareum cylindrum* と異なるため、*Briareum cf. cylindrum* としました。



図 5. 飼育していたウスカワヤギ属の群体から発見したセンジュミノウミウシ .

サンゴの上にはとても多様なカニ類が暮らしており、本誌ではこれまでキモガニとサンゴガニについてその生態やサンゴとの関係性をご紹介してきました。

今回はそんなサンゴに暮らすカニのなかから、サンゴガニと非常によく似た生態を持つヒメサンゴガニの仲間について取り上げたいと思います。

ヒメサンゴガニ属 *Tetralia* Dana, 1851 は全 10 の有効種からなり、国内からはこれまでヒラテヒメサンゴガニ *T. aurantistellata*、ナミダヒメサンゴガニ *T. brengelae*、スジアシヒメサンゴガニ *T. brunalineata*、パウルソンサンゴガニ *T. cinctipes*、ヒメサンゴガニ *T. glaberrima*、クロエリサンゴガニ *T. nigrolineata*、アカテヒメサンゴガニ *T. rubridactyla* の 7 種が報告されています。

本属のカニ類は通常、ミドリイシ属のイシサンゴ類に棲み、サンゴの枝間を生活や繁殖の場として利用しています。サンゴの枝の隙間は魚類をはじめとした捕食者からのシェルターとしても機能しているとされ、同じミドリイシ属でもカニのサイズや種類によって好むサンゴが異なるといったことも知られています。成熟した個体は基本的には雌雄のペアで生活し、サンゴの粘液や粘液に関連した（例えば粘液にからめとられた）有機物を餌としていますが、サンゴガニやキモガニのようにサンゴの組織を摂食することはありません。

体は小さく（甲長は 10 mm よりも小さい）偏平で甲は滑らか（図 1）、歩脚の先端（指節末端）はやや馬蹄形で、その周辺には様々な形をした毛や棘、棘の列などを備えています（図 2）。これらの形態的な特徴は「サンゴの枝の間で暮らす」ことに適応していると考えられており、狭い枝の隙間を素早く移動したり、サンゴの粘液を効率よく集めるために役立っているようです。

また、本属のカニ類は鉗脚（はさみ脚）の大きさが左右で異なっており、大きな方の鉗脚の外側（前節基部外縁）には毛の密集した窪み



図 1. クシハダミドリイシ上にすむパウルソンサンゴガニのペア。大きな鉗脚には白い毛の密生した窪みが観察される。



図 2. パウルソンサンゴガニの第 5 歩脚指節末端の顕微鏡画像。先端が馬蹄形をしており、その基部周辺には棘や刺毛が多数見られる。

を備えていますが（図 1）、この構造もまたサンゴの粘液を集めるのに用いられていると考えられています。実際、本属の1種が鉗脚でサンゴの表面を撫で、密集した毛に集まった粘液を口に運ぶといった行動も報告されています。

ではサンゴにとって本属のカニ類とはどのような存在なのでしょうか？

本属のカニ類とサンゴとの関係についてはサンゴガニと同様にオニヒトデに対してカニ類が攻撃行動を行うことや、サンゴ上に降り積もった堆積物を除去する行動、またサンゴの骨格を変形させてその中にカニ類が隠れ棲むことなど、いくつか興味深い報告があります。

なかでも、堆積物の多い環境下においてサン

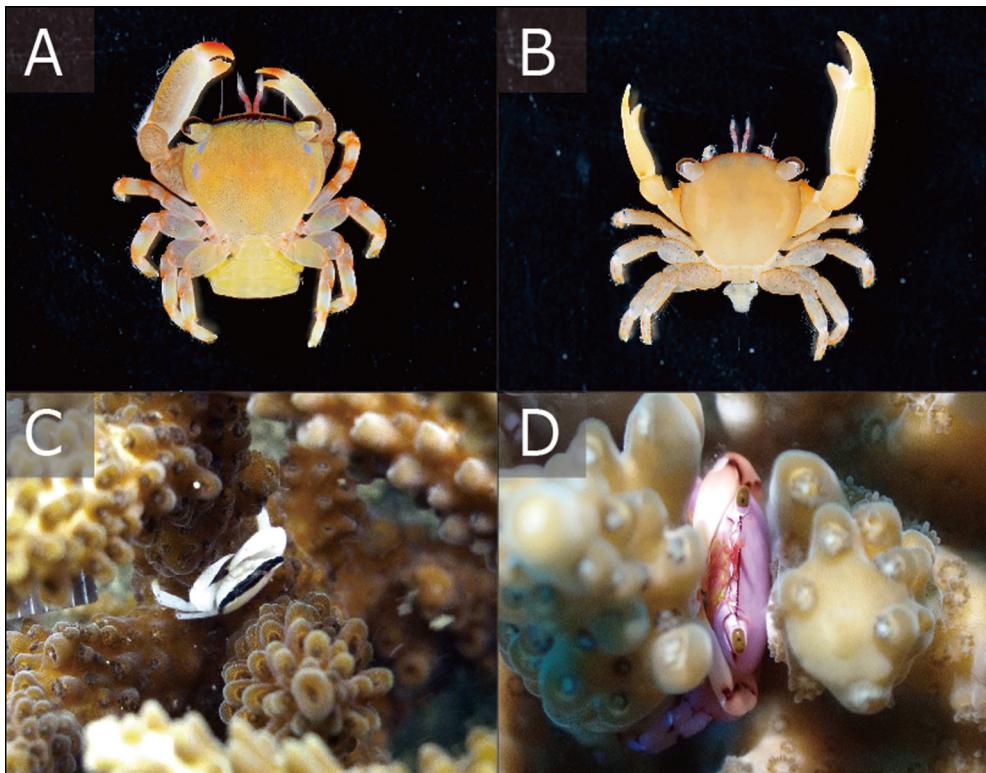


図3. 高知県沿岸で観察できるヒメサンゴガニ類. A: ナミダヒメサンゴガニ, B: ヒメサンゴガニ, C: クロエリサンゴガニ, D: アカテヒメサンゴガニ. A および B は採集後に氷冷麻酔を行い, 生時の色彩を撮影した.

ゴ上の堆積物をカニが除去するという行動は大変興味深く、Stewartら（2006）によるフランス領ポリネシアで行われた実験では、堆積物の多い環境下で試験的にカニ（ここで用いられた本属のカニはクロエリサンゴガニ）を除去したミドリイシ属のサンゴでは24日後に45%ものサンゴが斃死していたのに対し、カニのいるサンゴでは斃死したものはなかったとの結果が報告されています。さらにカニの棲むサンゴでは堆積物に起因した部分的な白化もほとんどなく、成長率も高かったとの結果も得られています。

一度定着した場所から基本的に動くことがなく、また栄養の一部を体内に共生する褐虫藻に依存しているサンゴにとって、群体上への泥や砂の堆積は代謝や成長において大きな影響を与えると考えられますが、カニがサンゴを掃除し、その健康を維持するといった報告は、まさにサンゴにとってカニが重要なパートナーであるということを示唆しています。

一方、オニヒトデへの攻撃行動については、本属のカニ類は体サイズが小さく、攻撃も管足をつねる程度にとどまることから巨大なオニヒトデに対して大きなダメージを与えることはできな

いとされています。残念ながらヒトデによる捕食対象のサンゴ選択においてサンゴガニのような強力な効果は無いようです。

さて、ここまでご紹介してきたヒメサンゴガニ属のカニ類ですが、じつは四国沿岸においてどこにどのような種がいるのかという情報は限られています。

今のところ、筆者の個人的な観察を含めると高知県沿岸ではナミダヒメサンゴガニ（図3A）、パウルソンサンゴガニ（図1）、ヒメサンゴガニ（図3B）、クロエリサンゴガニ（図3C）、アカテヒメサンゴガニ（図3D）の5種が観察できます。

このうちナミダヒメサンゴガニは2007年に新種として記載された種で、国内からの記録は少なく、四国の沿岸から見つかったというきちんとした報告もなされていないようです。

このようにヒメサンゴガニ属の国内における分布情報はまだまだ不足しています。本属のカニ類は種によって特徴的な色彩を持つものが多く、その生態や行動も魅力にあふれています。もし変わったカニを見つけた際には是非ご一報頂けますと幸いです。

突然ですが、皆さんは「クラヤミモミジマトイ *Sollasipelta subterranea*」という生物をご存知ですか？仰々しく長い名前ですが、漢字では「暗闇紅葉纏」と表記します。漢字にすると余計にややこしく感じますね。これだけでは何の生物かわからないでしょうか。2023年に私が新種として発表した海綿動物の一種です。本稿では、日本どころか世界でも全く知られていないと言っていい珍種の海綿クラヤミモミジマトイについて紹介します。

【「暗闇」モミジマトイ】

まず、クラヤミモミジマトイは、どんなところに棲んでいるのでしょうか？クラヤミモミジマトイは、通常では我々が近づくことすらない海底洞窟の中に棲んでいます（図1）。私は、2014年頃から沖縄の海底洞窟調査に参加してきました。海底洞窟というのは、その名の通り、海底にある洞窟です。陸上の洞窟と同様に中は真っ暗で、特に洞窟の奥の方は光が一切ない暗闇が広がる世界です。

一方、陸上の洞窟と異なる点は、洞窟内が海水で満たされているため潜水器材無しでは息ができません。また、海底洞窟での潜水調査では緊急浮上しても洞窟の天井に阻まれますし、洞窟内は場所によっては迷路のように入り組んでいるため、地形をよく把握していないと迷って非常に危険です。こういった海底洞窟での調査では、通常のスキューバダイニングよりも一層の注意が必要です。私が海底洞窟で調査を行う時には、メインの水中ライトとは別に予備の水中ライトを携帯し、更には水中用のヘッドライトも使用します。また、慣れない洞窟での調査時には、洞窟の入り口から奥に向かってロープを張り、迷わずに出口がわかるようにします。

海底洞窟で見つかる生物は、生態学的にも進化学的にも非常に面白く、琉球列島ではこれまで様々な貝類や甲殻類が報告されてきました。しかし、海底洞窟内において最も多様性が高く生物量が多いのが海綿動物です。初めて宮古諸島下地島の海底洞窟に潜った日のことを今で



図1. 海底洞窟の壁についているクラヤミモミジマトイ。

も鮮明に覚えています。洞窟の入り口をぐるぐる暗闇の中を進み、水中ライトを点灯した時のことです。光に照らされた壁面が様々な色の夥しい数のカイメンに覆われていました。その量、多様性は圧倒的で、十数回程度の潜水調査では到底その全容を把握することはできません。タンクのエアーが続くのであれば、ずっとそこにいて調査を続けたいと思わせられる光景でした。興奮した私は水の中で何度も叫び、同行した先輩方に「うるさい」と窘められたほどです。その海底洞窟調査において、当初からずっと気になっていたカイメンがいました。薄いクリーム色で小さな塊状のカイメンです。私は、そのカイメンを“可愛い”と感じたのですが、読者の皆さんはどうに感じられたでしょうか？このカイメンは後に新種とわかり、海底洞窟内の暗闇に棲むことから和名の前半部分を「クラヤミ」と名付けました。

【クラヤミ「紅葉纏】

では、和名の後半部分の「モミジマトイ」とは何でしょうか？これは、このカイメンが体表にもつ“骨片”という小さな骨の形にちなんでいます。カイメンは英語では sponge。スポンジというとキッチン等で使うフワフワした物体をイメージしがちですが、海綿動物の多くは骨片と呼ばれる小さな骨をもちます。骨片には様々な形があり、それらの形、大きさ、体の中での配置が海綿動物の種を分ける上で大事な指標となります。走査型電子顕微鏡を用いた観察から、クラヤミモミジマトイの体表は、“葉状偽三叉体”と呼ば

れる特殊な骨片で覆われていることがわかりました（図2）。これは、それまで日本では見つかっていないなかった *Sollasipelta* 属と呼ばれるカイメンの特徴の一つであることもわかりました。そこで私は、葉状偽三叉体の形を紅葉に見立て、紅葉を体表に纏うという意味で、*Sollasipelta* にモミジマトイ属という和名を提唱しました。沖縄の海底洞窟からのクラヤミモミジマトイ *Sollasipelta subterranea* の発見は、新種の発見のみならず、モミジマトイ属の日本列島からの初記録、さらには属の上の階級である科としても日本初記録となりました。ちなみに、モミジマトイ属の上の階級となる Neopeltidae 科には、まだ正式な和名が提唱されていません。今後、適切な機会に提唱する予定です。私は、この新しい科名も見越して“モミジマトイ属”と名付けました。

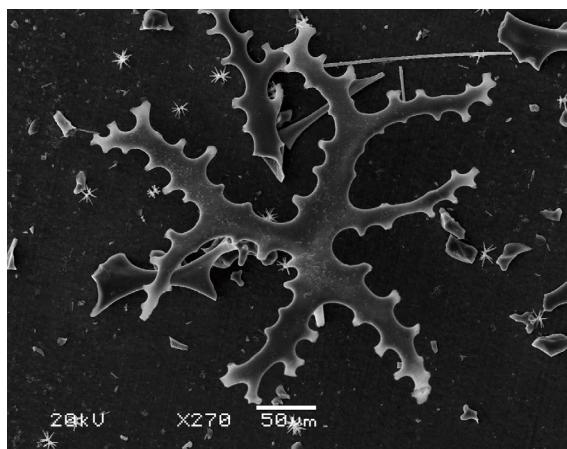


図2 クラヤミモミジマトイの体表に分布する骨片：葉状偽三叉体。

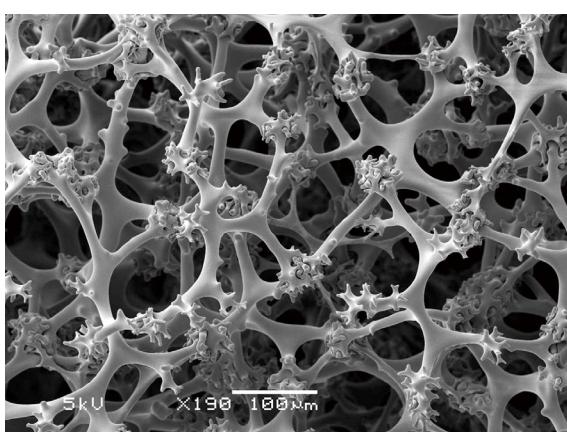


図3 クラヤミモミジマトイの体内的骨格構造：複数のデスマ体が組み合わさっている。

【デスマ体】

新種の海綿動物クラヤミモミジマトイの和名は、その生息場所と体表の骨片の形に注目したものですが、このカイメンの真の面白さは、その体の中の骨格構造に秘められています。クラヤミモミジマトイの体表は少し柔らかいものの、体の内部は非常に硬いのです。この硬さは、デスマ体と呼ばれる骨片同士が三次元にガチガチに組み合わさった構造に由来します。デスマ体の連結部分は人間が手と手を繋いだような形をしていて、電子顕微鏡で観察していると時間が経つのを忘れて見入ってしまいます（図3）。デスマ体に由来するこの骨格構造は非常に堅固で、クラヤミモミジマトイが死んでも、その骨格が海底洞窟の壁面に残されたままになっています（図4）。デスマ体をもつカイメンは、かつてはイシカイメン類と総称されていました。イシカイメン類の骨格は化石として残りやすく、カンブリア紀中期から記録があり、三疊紀（約2億5千万年前～約2億年前）以降の系統が現生のイシカイメン類と繋がりがあるようです。

私のこれまでの予備的な調査から、実は高知県南西部がイシカイメン類の宝庫であることがわかりつつあります。クラヤミモミジマトイとは別のモミジマトイ属の一種も採集済みです。順次発表していく予定です！



図4 海底洞窟の壁に残ったクラヤミモミジマトイの骨格。

参考文献

- 1) Ise, Y., Vacelet, J., Mizuyama, M. & Fujita, Y. (2023) New lithistid sponge of the genus *Sollasipelta* (Porifera, Demospongiae, Tetractinellida, Neopeltidae) from submarine caves of the Ryukyu Islands, southwestern Japan, with redescription of *S. sollasi*. Zootaxa 5285: 293–310.
- 2) 伊勢優史. 2019. 宮古諸島下地島の海底洞窟に棲息する海綿動物. タクサ – 日本動物分類学会誌 46: 13–17.

客員研究員の平坂です。私はライター業を務めるかたわら、南西諸島をホームフィールドとして、そこに暮らす深海魚の研究を行っています。今年は皆様にご支援いただいたおかげでついに新種発見の報を世に出すことができました。この場を借りてあらためて御礼を申し上げます。



2024年3月に新種として記載されたキホシサザレヒメコダイ。沖縄島沖にて釣獲。

ところが！実はこのところは日本本土の海で船を出すことも増えてきています。おやおや？たったひとつ成果を上げたくらいで他海域に浮気？と思われてしまうかもしれませんが……。いえいえ、研究にまるで無関係な活動というわけではないのです。この試行が成功すれば、採集スキルはさらに向上、調査対象となる黒潮のフィールドも拡大していくことでしょう。

……そのプロジェクトとは、駿河湾を舞台に2500 mを超える水深に暮らす魚類を「釣り」で採集すること。潜水艇やROV、深海延縄などの特殊かつあまりに高価な装備なしで、どこまで深いところの魚を捕えることができるのか？これは僕のライフワークとなりつつあるチャレンジなのです。

ちなみに、深海の魚を狙う遊漁文化自体は日本各地に散見されます。たとえば高知では水深300 m 前後でアカムツ、400 m 前後でキンメダイを対象とした釣りが盛んです。商業的に確立されている遊漁でもっとも深場を探る釣りは相模灘におけるオオサガ（別名ベニアコウ）釣りで、

そちらは最大で水深 1000 m までが漁場となります。もっとも、オオサガ釣りほどの深場となればそれは非常に極端な例で、遊漁者人口もかなり限られるやや「エクストリーム」な釣りですが。

なお僕の知る限り、町の釣具屋さんで買えるような釣り竿、リール、釣り糸を使用した普通の「釣り」で魚を釣り上げた世界最深記録はどうやら 2018 年・和歌山沖での「水深 2000 m でモツシデアナゴを釣り上げた」というものようです。なお、その記録を達成した偉大なる人物の名は……「生物ライター・平坂寛」。はい、私でございました。

というわけすでに一定の成果を上げてはいたのですが、その記録をさらに深く更新しようと思い立ったわけです。まあ、こんな記録を追いかけるのは僕くらいなものなので、ただの一人相撲なのですが……。



キンメダイも深海釣りの対象としてはメジャーどころ。



2018 年に和歌山県沖の水深 2000 m より釣り上げたモツシデアナゴ。

志を同じくする仲間を集め、定めた目標は「水深 3000 m の魚を釣る」こと。前回の記録にプラス 1000 m です。ところが、いざ挑戦してみると水深 2000 m とは比べ物にならないほどその難易度は跳ね上がっていたのです。

釣りなんて、どれほど水深が深くなろうと基本は同じものです。エサがついた釣り針さえ用意すれば、あとはそれを水底に届けられるだけの長さの糸とオモリがあればどうとでもなる。そう考えていました。いや、たしかにその理屈は間違っていないのですが、ものには限度というものがありました。

まず水深 3000 m ともなると、リールに巻くべき糸の量は潮流による弛みを計算に入れて 4000 m といったところです。が、これだけの長さの糸を巻くリールがない！あれこれ探してやっと見つけたのは、漁業者が巨大なクロマグロを一本釣りする際に用いる電動リールでした。おそらく、現状では市場に出回るリールの中でもっとも糸巻量の大きな製品でしょう。

……もうすでに「遊漁」「普通の釣り」から足を踏み外しかけている感がありますが、ちゃんと一般向けの釣具店で購入したものなのでセーフでしょう。ただし、店員さんには「一般のお客さんがこのリールを買うのは前代未聞。マグロ漁師しか買わない代物」と驚かれてしまいましたが。



ランドセル大の電動リールを使用。力強い「鮪」の文字が刻まれているが、おそらくマグロと名のつく魚を釣るのに用いることは今後一切ないだろう。



ダイナマイトではありません。釣りのオモリ（束ねた鉄筋）です。

そして使用するオモリはなんと重さ 6kg の鉄筋です。うっかり足にでも落とせば骨折確定であろう代物。このオモリをぶら下げるのですから、必然的に糸も竿もやはりクロマグロ用の太く強靭なものを揃えることとなります。

……という具合に道具立てからまず大変。ここだけの話、リールだけで四十万円以上、糸だけで二十万円以上がかかってしました。でも！ ROV を購入することを考えればなんのこれしき、まだまだ安い！

……もちろん、ロマンと引き換えに生活はかなり厳しくなりましたが。

そして、さらに大変なのが実際に船を出してからの作業です。いったん仕掛けを沈めてしまうと取り返しがつかないので、釣り針は 10 本と多めにセットしてそのすべてにサバの切り身を刺します。これを先述の 6 kg 鉄筋で沈めていくわけですが……。このサイズのオモリとなると、投入時の勢いはもはや砲弾です。凄まじい速度で 10 本の針が海面へと射出されていきます。うっかり針先が手に食い込んだりすれば大怪我必至。二人がかりで慎重に投入していきます。

あとは仕掛けがそこへ沈むのを待つだけなのですが……海底到着までにかかる時間は水深 2700 m のポイントで実に約 40 分！ 3000 m 地点ではさらに長い時を要します。さすがは東京スカイツリー 4 本分以上の超ディープゾーン。アクセスは容易ではありません。しかし、真に深海の遠さを痛感するのは「帰り道」なのでした……。

釣りというのは糸電話のようなものです。ピンと張った釣り糸を伝って、魚が餌に食いつく振動や、針にかかった魚が暴れる衝撃が海上の釣り人へと届く……。しかし、水深 2000 m を超えてしまうと糸を伝う振動は減衰し、潮流によるノイズが混じり、魚からの反応はごくごくわずかにしか感じ取れません。……たとえそれが全長 1 m を超える大型魚であったとしても。

なので仕掛けを引き上げるタイミングは「勘」に頼る部分が大きく、明瞭な引き込みがない場合は 1 時間ほど仕掛けを流したところでリールを巻いて仕掛けを回収する、という作戦をとります。が、ここからが長い長い！

なんと！仕掛けを巻き上げるのに 4 時間以上もかかるのです。ゆえに一回の出船で仕掛けの上げ下ろしをできるのはたったの一回きり！そう、毎回わずか一投のためだけに沖縄から駿河湾へ行っているんですよ。何度も何度も。そろそろトータルの旅費が命を削りかねない額になってきています。

さて、巻き上げにやたらと時間がかかるてしまうのは、単純に水深が大きい、すなわち巻取りの距離が長いというのも理由の一つです。が、それに加えて仕掛けと釣り糸に加わる水圧の巨大さも影響しています。深海へ垂らしているのは細い細い化学繊維の糸ですが、全長が 4000 m ともなるとそこへぶつかる潮流の全抵抗は凄まじいものになるのです。クロマグロを軽々と釣り上げられる電動リールのモーターは唸りを上げ、竿は根本から曲がります。それでも市販品でど



水深 3000 m の水圧を受け、とんでもない曲がり方をする釣り竿。

うにかかるのですから、日本製の釣具というのはたいしたものです。

……と、こんな異様な釣りをここ数ヶ月間で 7 回にわたって繰り返してきました。毎回、往復で最低 5000 m 以上（最長では 8000 m 以上）も仕掛けを上げ下ろししているわけですから、そろそろフルマラソンに匹敵する距離を駆け抜けたことになります。

これだけやればそりや成果も出ます。ではお待ちかね！釣果の一部をご覧いただきましょう。まずはこちら！



見よ！この現世ばなれした魚！

2000 m 以深を代表するの巨大魚、アシロ科に属すソコボウズです。感動しました。個人が釣りで採集できるような魚ではないと思っていたのですが……。できるものですね、ソコボウズ釣り。

水深 2600 m から 3000 m まであちこちのポイントで姿を見せてくれました。深海魚といえば全身が真っ黒だったり真っ赤だったりと、闇に溶け込む体色のものが多いのですが、彼らは淡い褐色で、むしろ浅場の底生魚を思わせます。また、ギヨロリと眼の大きな種が多い深海魚にあって、やや退化的でつぶらな瞳が印象的です。こうした特徴は、これほど深い場所になると視覚に頼らない生物も少なくないを示すものかもしれません。



ソコボウズをこの手に抱ける日が来ようとは！

はじめて本種が水面に浮かんだ瞬間は、船上が絶叫に近い感性に包まれたものです。
さらにこんな魚たちも……。

カナダダラにイバラヒゲです。これらの種は水深1000m台の水域にも出現するためソコボウズよりは目に見る機会の多い魚です。しかし、いずれも深海魚ならではの魅力を大いに備えた素晴らしい魚たちであることは疑いようがありません。

計7回の挑戦をこなすのにかなりのお金と時間を費やしたのは事実です。しかし、こうした魚たちと出会えるとその甲斐があったと心から思いました。そして、さらに奇妙な魚たちとの邂逅を求めて、今後も引き続き駿河湾でこの釣りを続けていく所存です。

もちろん、その過程で得た知見とスキルは黒潮の海でも近々活かしてみようと考えています。みなさまぜひ今後の報告を楽しみにお待ちください。



漆黒のボディが美しいカナダダラ。



イバラヒゲの多くは水圧差で眼が飛び出してしまう。

研究所からのお知らせ

ARKと黒潮生物研究所、黒潮流域に生息する海洋生物に関する共同研究契約を締結

株式会社 ARK（東京都渋谷区）と公益財団法人黒潮生物研究所（高知県幡多郡大月町）は、黒潮流域に生息する海洋生物に関する共同研究契約を締結致しましたのでお知らせします。

本共同研究によって得られた成果は、黒潮が作り出す環境とそこにすむ生物との関わりを明らかにすることに寄与し、海洋における課題の解決と水産業の発展、陸上養殖産業の更なる活性化を目指して取り組んでまいります。

令和6年度 大阪 ECO 動物海洋専門学校－臨海実習 in 黒潮生物研究所－

10月8～10日に大阪 ECO 動物海洋専門学校 海洋生物保護専攻の臨海実習を行いました。学生16名＋先生1名が来所しました。

研究所に到着すると、早々に海へ。シュノーケリングをしながらのモニタリング方法を学びました。2日目は、漁獲調査と魚類の種同定、水質測定実習と藻場についての座学がありました。3日目は足摺海洋館 SATOUMIと足摺海底館、竜串ビジターセンターうみのわの見学、カイメンの骨片観察、最後には懇親会もあり、とても盛りだくさんの3日間でした。



研究所についての説明を聴く学生たち。

竜串リーフチェックを実施しました

11月9～10日に竜串リーフチェックを実施し、今年は一般から5名の参加がありました。

リーフチェックでは、竜串湾のサンゴ群集が広がる浅瀬で、メジャーを引っ張り、ライン上にあるサンゴや底質、魚類、無脊椎動物を調査しました。

また、初日に戸篠祥主任研究員による講演「足摺宇和海国立公園でみられるクラゲたち」がありました。参加者は普段聞くことのできない話に興味津々といった様子でした。



講演する戸篠祥主任研究員。

Current（カレント）季刊 2024年11月27日発行

編集・発行 公益財団法人 黒潮生物研究所

〒788-0333 高知県幡多郡大月町大字西泊 560番イ

TEL 0880-62-7077; FAX: 0880-62-7078; URL: <http://www.kuroshio.or.jp>

E-mail: mail@kuroshio.or.jp (機関誌購読を希望される方はご連絡下さい)

3000円以上のご寄附でその年度のCurrent 4号分を送付いたします。寄附は当研究所のホームページまたは寄附申込書から受け付けております。

※本誌の一部または全部を複製する際には当研究所宛てに許諾を求めてください。